

童蒙卷一草

二編

五

大尾

特279-189

279

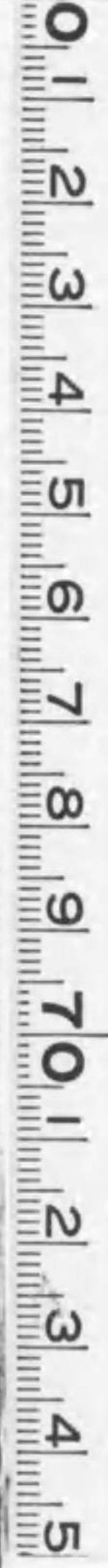


89

庫書省部文

五	七七	二	九	五	原
冊	號	架	兩	屬	類

第 五 冊  
共 五 冊



始



特 279  
189

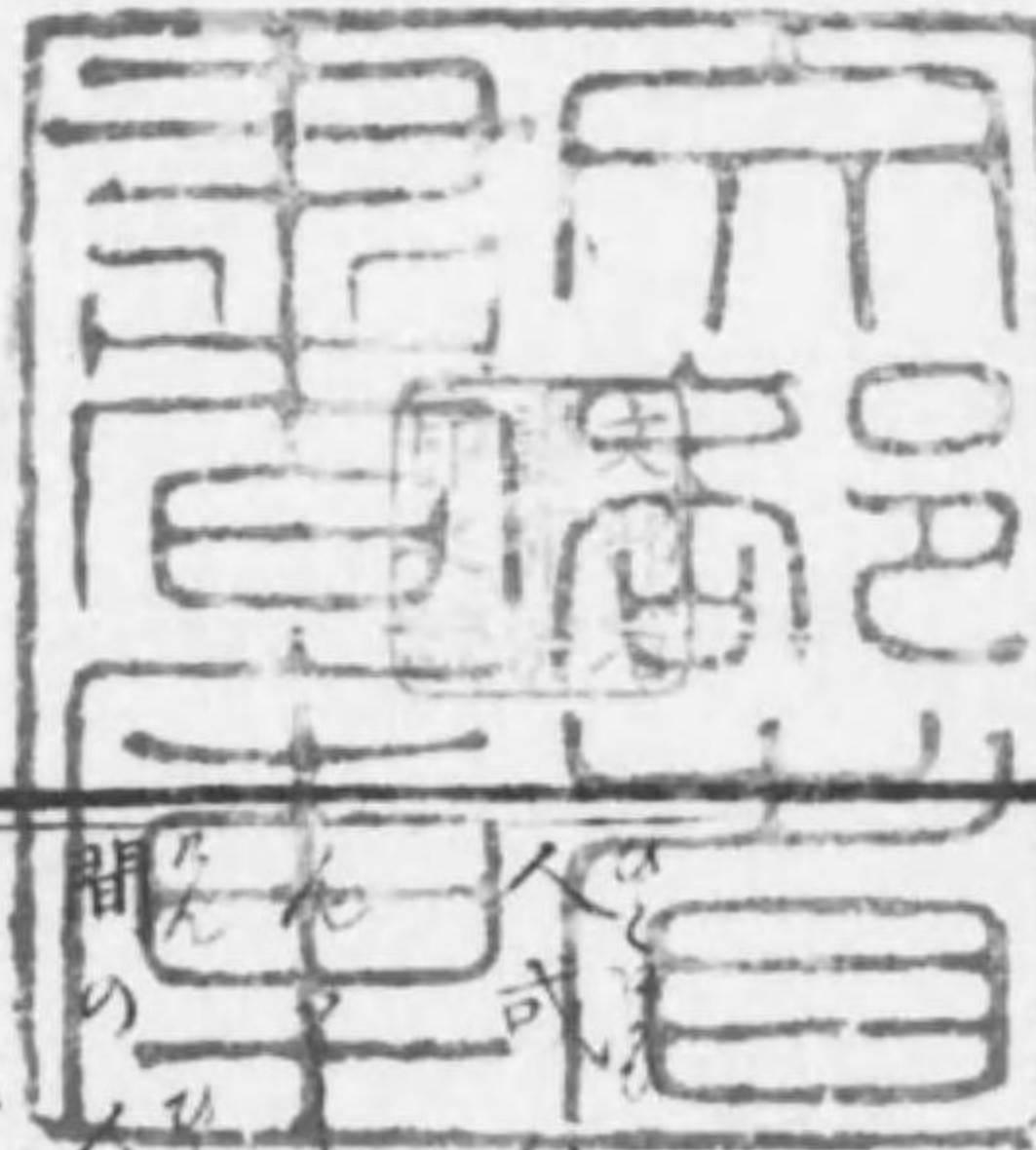
文部省

通譯局

通書山章

童蒙

書庫引繼之證



第二十七章大量ふる事

心の狭き者りり些細の事人も人の不調法を見出さ  
つうかたかこの失禮をもこきを見て咎めんとし世  
間の人と同一職業をまはバ同職の人を羨み其繁昌を  
嫉む一度人小辱しやうるゝとつらも永き月日を經きバ  
忘るべき筈なる小深くこき心の底小舎で時以きバ其意  
趣を返さんとまらふど如何小も賤しむべく又惡むべき舉

福澤諭吉 譯



編輯局第三課引繼  
明治廿一年十月受領

動あり心廣き人の舉動ハ全くこま不異あり他人の失禮を  
 るを見てこま心小留めを或ハ怒ること何るも忽ちこま  
 を忘きて痕ふく我身小ハ不幸何るも他人の繁昌を見まバ  
 こま悦び事を為さ小當てハ他人と争ひ競まざり小ハ非  
 ざもども其争ふや自わ小賤一かふまよく人の心を推察一  
 て一々其舉動を咎めを或ハ粗忽小一して罪を犯一我身小害  
 を及ばもこと甚だしき者何くと雖ども其罪を赦一して問こ  
 を何等の事故何るも權謀術數ふと賤一き策畧を以て自分  
 の趣意を達せんと思ふことなく人の身分ハ賤一くもその  
 心正一けまバこま小辱一むることなく假令ハ人を叱るも

人を惡むこと小一こま我一口小云ハ其氣小常不安らう  
 小一て他人の身を害一他人の物を奪ふふどの心ハ促一て  
 も起らざるものありこま小大量の徳義と以て實小世小稀  
 あり徳義小てこま小貴まざり者ハ小一

① 小せど小やの君ハ小をらふ一け多小近來國中の

或人小せど小やの君ハ小をらふ一言上一け多小近來國中の  
 學者共様々の言を流一て君の評判を何一くも者少小ふ  
 らむと以て事小寛仁大量のひてつ小は一き顔色を小為  
 きをて云く其評判の虚言々真言ふるハ余ガ行状の良  
 否小由て分ることなり其流言を咎るよりも余ガ身を慎む

べし

又或一人の家来君を誘てたる小由りこも後追放し給ふべしと勸る者ありし君の云く先づ急ぐ事なくを或ハ我より彼の者を促して斯る粗言を吐きしめしやも知まざる色々と詮索せし小案の如く此家来ハ嘗て君のため不功を成して褒美を得ざりし者ありけしバ君ハ大ハ後悔し彼の罪小しきを余が罪ありして即刺こも褒美を賜さるたりとぞ

ありあるまむとびとるひんの事

紀元千六百年の時代英吉利の内乱ありて其國王なる第二

世にむを追出し第三世ありぬるまむ代て國王の位小即きけしバ國中ハ觸を出して先の王と音信を通むる者ハ大逆の罪たりし其の旨を布告したりさきども國の貴族等ハ私小ぜんむを文通多し者多く其中小もごどるひんとつへる貴族ハ兼て正しき人物ありしが一筋小ぜんむその方ハ左祖一度々密書の往復も有りて國王ありぬるまむの聞小達しけしバ或日ありぬるまむこの人を内談の坐鋪へ召し探得たりし密書を出してこも示し國の大法を犯しハ宜しからざることふも先君を慕ふの義氣ハ感むる小余あり願くハ汝が如き人物を以て余が朋友と為しなき

ものありて其密書をバ眼の前にて焼棄この度の事を心  
頭こころに扶たすけざるの證據しるしと示ししけきバ流石りゅうせきのどどかひんも王  
の大量たふら小心しんしんを奪うばつる以前の標めしるしを改あらためてとまふ従したがひ腹心の  
家来けらいとありしは

はむむうぬらせろへの事

ちむむうぬらせろへハ佛蘭西ふらんせい小稀こまなる美人びじんあり又この時  
小へそさうとて名高なだかき醫師いしたりて彼の美人びじん小親おと親おとを相互あひあひ  
戀慕こいぼをもども双方ふたうの身み不釣合ふつうあふるため夫婦ふうふの約束やくそく  
も出来できがさく醫師いしも自みづからとこも代思しろお切きらんとして婦人の  
家小近けいぢづらざること數年すうねんありしは或時あるとき婦人にん病やまふ催もよほして格

別べつの容体ようたいハハちとぞれと刺絡しよくをくき病症びやうなるゆゑ彼の医  
師しを招待しょうたいしてこそ汝頼にたり醫師いしハ又ハ振ふるふて婦人にん小逢  
ひ魂たまも空そら小飛とぶとりてふて狼狽ろうたいの余あま小脉こみの筋すぢを取違とへ  
動脈どうみやくを刺さたりけきハ出血しゅつちやくの甚こだきハ勿論もちろん命いのちも危あやき不  
どある小婦人おんなハ更さら驚おどろく色いろもあつて三日さんじつを經へて以もつよくむ  
づかしき容体ようたいとあり腕うでを切落きりおさるれば養生じやうじやうも叶かなひ難がたき場  
合あ小至こ至こたまども醫師いし小對たいして不足ふそくなる顔色かおいろをも顔かほささ  
を尚さらも其療治りやうぢを水みづけりしは病症びやうハちとく進すすみ最早さいぜん一昼  
一夜いちやの間の間ま小命いのちも終おるべき難症がた小陷おり醫師いしの心苦こころきハ壁かべ  
へん方かたふく胸むねを割きき腸ちやうを断たつつの思おもひを為なし心配しんぱしけきハ病

人も醫師の顔色を見てても助りかべき路も何とぞと悟  
て家内の者へ遺言し終りて傍の人を拂ひ醫師を枕下小呼  
でこも告げて云く最早この世の暇乞ふまば蔡も亦心の  
中を告げざりべかたを君ハ斯る誤を為せしと虫ども蔡も  
於て露をうりもこも涙恨と思を假令ひ今この世を去  
も未來ハ更小死世界小行くべきことふまば蔡が身小取  
りてハ却て幸福あり唯残念あるハ世間の人の君を見るこ  
と蔡が君を思ふが如くあふをして或ハこの度の一条小由  
も君が家業の名を落もこともしらんりと思残もことハ唯  
この一事の故小蔡ハ成るたけ君の心配を少ふくせん

ため小遺言の中小も其次弟を記せしことありこの世の縁  
もこも限里随分よめ小暮し給へとして死生の別を告げたり  
あり  
婦人の死後小至り其遺言の書面を改めし小大造ある遺物  
を此醫師へ遺し興ふるとの次第を記せりをもくこの婦人  
の死したるハ全く醫師の所為ふまども其實ハ罪何る小非  
を其罪ふまば知りて斯く取扱ひしハ婦人の大量美德とい  
ふべきあり

㊦ 若き画工三人の事

伊太里小名高き画を學ぶ學校りりて稽古をる者甚ど多し

其稽古人の内小相いどつと云ふは、  
事小出来て先生方も皆こき小驚きこの様子小て追々執行  
と遂げふバ行末ハ必を銘人小も亦るべしとてこき小譽め  
ざり者ハあり

然多小この學校小二人の稽古人たりて一人をぶちあちと  
以ひ一人を「ろきん」と以ひ二人ともがいとつとの友建あ  
りしがこの度の画のこと小付き兩人の思ふ所大小異あり  
ぶちあちハ「がいとつ」とよりも少し先輩小て画も相應小出  
来る者ありしが彼の「がいとつ」の画を見て大小力を落し  
こき小で画のため小ハ自小も評判を取てこき小も

朋輩の内小一段たちつたり者たりてハ已に譽も衰ふる  
ことありんと賤しき心を抱きて只管がいとつとを悪し何  
とくして彼が評判をとりくせんものと思ひぬきども彼  
の画ハ實小も出来小て既小諸先生も譽めこき小も  
今更こき小出来ありとて誇りき由もつたを乃ちつり  
き工夫を運らり何と云ふ言を流して彼の「がいとつ」の画  
ハ自小一人小てかきもの小なりと或る先生の加勢小由  
て一時の評判を取てこき小も其實ハ僥幸あり云  
編らりけり

あき小引替りろきんをハ以りて年若き書生小もこき小

どつとが画の巧みを見かけ心の中より感服してこそ後  
 稱美をること限ふ諸方にて彼の画の評判高けきバこそ  
 を聞くか就ても何卒斯る画工かありたきりのと思ひ頻ふ  
 出精して怠ることふ一同よりがどつとの上お出んとハ  
 敢て望む所お何れぞんども唯願くハ同様の者おあふんと  
 て一筋ふこの人を目當ふして己が藝を研きがどつとの  
 ことを口ふさ人云へバいつもこそを譽めざることをあへて  
 のぶろわろが色々と言を構へてがどつとを誇るを聞き  
 常ふことを堪へ難く思へり  
 右の如くろきんをハ一心一向お画の藝を研き毎日稽古の

場所へ通ふも人より前お行き人より後お歸り家お歸り  
 ても徒お時を費さを唯稽古の身を委ねけきども以ま  
 だ其藝を以て自か満足せむ幾度とよく試みてハ又試  
 或ハ躬か自分お画を見てさてく及をざることを此画  
 を以てがどつとの筆お較べか其及をざることを幾段ふ  
 るべきやふどと歎息せしかどことありしが月日を重ぬ  
 るお徒ひ次第お上達して自かおもいささ満足し世間の  
 人も其画を譽る者少あふを乃ち又躬か力を附て云く  
 余も人ありがどつとも人あり何ぞ必しもこそお及ぶ  
 べくとざるの理もあらずと



かいつとハ上達して今ハ學校の中おても其右小  
 出る者ふくぶろねろも一時ハこきと覽ひーうども逆も及  
 ぬこと、何きより唯がいつとの画を見まバ妄ふこき  
 を誇るけしき評のミして自か其藝の拙き代覆もんと  
 ミしけるふろきんをハ絶て議論を好まを人の知らざる愚  
 みて獨其藝を研き自分のかき一画をバがいつとの画  
 の傍へ持来りーこともや

この學校の仕来ふて一年ハ一度稽古人の画を坐鋪へ掛け  
 諸先生の監定ふて其甲乙を取極り最上の者へ褒美を與ふ  
 ること、何りこき代画の展覧といふがいつとも此展の展

覽へ持出さんとて力を盡して一枚の画をかき當日の前晚  
 小至と漸く成就して其仕揚ふ色をよくもるたり脂を引き  
 其より彼の坐鋪へ掛けて明朝の展覧へ供へたり然る小  
 ろねろハがいつとが去り一跡ふて竊小坐鋪へ入る其画  
 小何り腐蝕薬とすりかまて散々ハこき代残ひーハ其惡む  
 べき所業ある  
 ろきんでも同トく力を盡して画を作て其心願ハ唯がいつ  
 つとの画よりも何より下ハ落ちざるやうふと思ふのそ  
 叔その夜も明て當日の朝小至り廣く明らき大廣間へ諸先  
 生も追々入来りて拭並べたる画を次第次第小見かして何

もが心どつとの作ハ格別見事あふんと初より心の中お待  
ちまふけ居たりし不豈圖らんや画の面煙の如く村雲の如  
くして生たる筆意とてハ少しも見へざりけしバ諸先生も  
案不相違しこハ同人の作ハ非らざりべしとて唯驚くを  
りりなりが心どつとも此様を見て齒をかみ腕を不ぎりて  
憤ふきども更おせん方も何をも唯惡むべきハ彼のぶるね  
ろかり志を伸たりと獨り座鋪の隅おて他人の心配も  
を見て心お悦ひ居たりしを不敵あきしれお引替へるま  
をハ本人よりお却て心をいたしめ大音揚てこハ人の所  
為ありこハ人の惡計あり諸先生もよく見給へ共の画ハが

心どつとの作おろくを余ハ同人の画のふうを成さしとて  
一見たりしお其見事ありしこと譬へんかあし今この  
画おても其周圍の筆意を見て斯く疵付かざりし以前の巧  
拙を判断し給ふべしと唯獨りおて類お其言譯を為せり  
見物の人々も皆ろせんぞが大量ある感と且ハが心どつ  
との不幸と氣の毒おハ思へども當日の規則おて何分おも  
斯くきたおき作へ褒美を與ふることお出来兼尚其外の画  
を見分せしお衆評お由るろせんぞの作を第一と定めてこ  
を當日の褒美を與へたり然るろせんぞハ一旦この褒  
美の品を受取り直しこは成が心どつとへ授けて云く共の

品ハ余が取るべきものハ何れも君一君の画ハ賤しき舉動  
 を為せし者もかくバこの褒美ハ固より君が手ハ落るること  
 疑も何れも假令ハ然るときも君ハ第一ハ一して余ハ直ハ  
 君の次ハ是バ余が身ハ於て何の面目ウこま小君ウんこの  
 後余も出精し君と等々同ふるの望あき小何れも  
 も唯公けハ藝を覺ふべきのそかりをめおも鄙劣なる舉動  
 小陥ることあうん是余が心の中の實ありと  
 監定の諸先生もろまんぞ仕打を見てこまを譽めざる者  
 何れハ何れも遠ハ一同相談の上小てこの度限王同様の褒  
 美を二通り差出ること小決定して其一ハが以どつとが画

の巧なるがため小こま成興ハ其一ハろまんぞが徳義の美  
 事ハがため小あれと興ふハ一とて當日の事を終り一とて

④ 瘦犬の煩をさし事

ふらん一ととひへる子供その先生小伴ハ或村を通行せし  
 折しも二三疋の瘦犬恐ろしき氣色小てこまハ吠けり或ハ  
 咬付かん一或ハ飛付かん一して其煩をさし小堪へざる  
 らん一とハ杖を振廻し或ハ石を拵ふてこまを追ハ直ハ  
 逃去せども振返りて二三間も歩りバ又後より附来りこま  
 と如何ともまかたを兎角も問小或ハ百姓家の畑の畝  
 まで来りて彼の瘦犬も去りたり然る小この畑の傍小肥え

太りたる一疋の飼犬ひあさびやかうして駈り居たをば  
 らんしむハ復と大不恐も先生の側ふさう付て其處を通り  
 過ぎ一不犬ハゆうくとして此方を見向きもせざりけり  
 兩人ハ又進で鳥獸を飼ふ原ふ至りしハ一羣の鶯鳥人を  
 見て鳴き駈ぎ何れも長き頸を揚て兩人の方へ向ひ來り其  
 有様かりしとも何れ又馬鹿らしくも見へけりば  
 とも笑ひあがら杖をもて一寸其頸を打ち其より通り過ぎ  
 て少く先きの方へ至るはこゝハ數疋の牝牛一疋の牝  
 牛不伴あて群居たりあふんしむハ又少く恐るる様子  
 あつらども牛ハ平氣ふて草を喰ひ其頸をも揚げざりけり

先づこの兎も無事不通り過てあふんしむハ先生お向ひ彼  
 の飼犬も牝牛もかとおしく一々鶯鳥瘦犬の如くあふざり  
 一ハ實小仕合なりしをさあを同ト畜類ふて斯く相違  
 何れハ何故なるやと尋ねけり先生云く都て弱く賤  
 き畜類ハ自分の身不頼むべき力もあく勇氣もあらず初  
 終他の者より害を加へらるんこと何れ恐も我より先不他を  
 犯して身の災難を通せんと思ひ動もせし何物不向ても  
 駈がしく敵對をることあまども其實ハ憶病ふし相手の  
 ものを恐るありこも不別替へ自分の身を護るだけの力

を備ふる畜類ハ己ガ身を頼みて他のものを疑もざりや  
 悉いつも平氣にして身の位を失もざりや此ハ唯畜類  
 のこゝろを人にも亦然り弱く賤しき人物ハ常ハ他人を猜ひ  
 其顔色いつも不平あり自分より立上る者巧まばこそ凶惡  
 是て妄不嘗て憶病の餘り不ハ相手の人へ失禮をも加へて  
 只管身構とせんともかものあり唯大量の君子ハ然らざる  
 の心常ハ静ふして人を犯さざる人を害むることなく人ハ害  
 せらるゝと云ふと云く或ハ僅ハ害を被ることあるもこゝろは捨  
 て問をも其故ハ假令ハ害を被るて違ふ彼是としていふ  
 を取れざるも亦自分の身ハ頼むべき力量の由り

何時ふても然るべしと思ふより小事の茶理を取れさんと  
 する覺悟はあり

○わが奉行の事

兩國戦争ハ及ぶやハ互ハ力を盡して双方の害を為し或  
 ハ軍勢を出して敵の國を荒らし人を殺し物を奪ふ或ハ  
 軍艦を出して敵の船を打碎く或ハ乱妨狼藉至らざる斯ハ  
 斯く双方の人氣荒立ち惡事を犯す其中ハ敵ハ對して正  
 しく事を行はざる深切を施さんとする者ハ實ハ大量な  
 る人物といふべきあり

頃ハ紀元千七百四十六年英吉利と西班牙との間ハ戦争起

り互に軍艦を出して双方の船を打碎かんとせり折しも  
 んどんの高買船をせよとせよとつゝ船多く荷物を積んで  
 西印度の港へゆく間を過るるに船の底を  
 破りて水船と為りしり小由り乗組の者ハ唯その命を救  
 んぐためきゆをの港へおまへ乗込たりこの處ハ即ち西  
 班牙の領かまきハ乗組一同の者も身ハ倅とあり船も  
 港の奉行ハ面會し船ハ固より引渡さるけども乗組の人  
 數ハけハ假令ハ倅とふるもその取扱を寛小為し船も  
 一と請ひしをハ案ハ相違し奉行ハこの船を受取らる

云く君の船若し戦争のたけふこの港へ入るべしことありハ  
 去を分捕るべきハ當然ふきども唯是高買船の難船ハ  
 るものふし君等ハ漂流人ハ等しき難波あり身あり余ハ心  
 小於てハ當ふことと害せざるのそありを又こも戻助けざ  
 る可らむ故ハ乗組の人ハ安んトてこの港ハ止ま今日より  
 船の修覆ハ取扱ひ或ハ修覆のへ用と拂ふがなりハ荷物を  
 賣るも勝手たりく修覆出来の上ハ何時も自由に出  
 帆せりこと我西班牙の船ハ異なることありしり  
 右の次第ハ船の修覆も出来て出帆しんとするハ奉行  
 ハ尚も心をよく印鑑を作り近海ハて西班牙の軍艦ハ行

逢ふこと所るゆゑの船小害を加ふ可らむとの旨を記し  
 の印鑑を渡し船を送出せり  
 右の如く「君さま」をハ思はぬ不幸の中事業を得て難ふく  
 ろんどんへ歸りハ全く「わが」の本行の大量小由て出来  
 一ことあり

第二十八章 武勇の事

危き所恐むを以てこそ小向ふ者と武勇の人と云ふ事の趣  
 意宜しき小叶ハハ勇氣を振ふて危き小向ふを良とを譬ハ  
 ハ同類の人の災難を救うて其死を免るは或ハ強盜を  
 防て自分の命と物とを護り或ハ敵の軍勢を追拂うて我本

國を守らる如きは何れも趣意の宜しきものありては是が為  
 小ハ勇氣を振ひ危き所犯しを憚ることありて良とをり  
 是も是れども事の趣意宜しきものありては假令ハ勇氣を振  
 ふもこそは譬ふ不足るを譬ハ物を奪もんがため小働  
 強盜ハ強くして勇氣の多く徒ハ他國を害せんがため小  
 攻入る所の軍勢も亦強くして勇氣の多くと雖どもこハ  
 唯その働の猛きのみてこそは武勇といふ可らむ古より  
 武勇の大將とて名高き人なれども其實ハ武勇あまざる者  
 多し假令ハ軍小ハ勝つと雖どもその軍の趣意宜しかざる  
 是ハ真の武將といふ可らざるなり

⑤ ぐんをだるもんくの事

千八百三十八年の九月廿三日をもちよとつへる蒸氣船英  
 吉利の「ゆをぼんてからんどの近海」にて大風小逢ひし  
 船の作も堅かき且蒸氣の器械も整しきをいふため  
 波風小堪へざして遂小げきいともるかをといふ岩山は吹  
 付けし船ハ碎けて乗組の人数も海小溺り者多く一人  
 もたもかるべき様子ハ見へざりあり  
 この岩山小迫きのゆをさんだらんとつふ處小燈明臺の  
 其番人ハだるもんぐある者小て一家内共小燈明臺の下  
 小住居したうらこの風雨の曉小彼の「げきいともるかを

の方を眺むハ一艘の蒸氣船荒き浪小もまき今小も碎けて  
 沈むべき有様あり番人ハ所持の小舟小てこも助けん  
 一且ハ思立ちしふきど彼の恐ろしき浪風を見てハさても  
 叶ぬことありさて又思止り如何ハせんと思案の折柄二  
 十二歳の娘ぐんも女おぐも父小勸て共小舟小乗り自  
 分も橈をかして助小赴かんとつふ親父も力を得て親子  
 共小舟小乗り山の如き大浪の間をくぐりて遂小本船の  
 處まであぎつけ九人の人を救ふて小舟小乗せ難ふく燈明  
 臺へ歸り様々小手當して命を全ふるを得たり  
 右九人の外小助かりたり者ハ一人も何れをさきよこの娘



の武勇ふりせせ八九人の者も空しく海に沈みし筈あるハ  
疑ふべき小つらも唯一筋ある真心ふて人の死を憐れ  
り観る小慈悲を身を殺して同類の人を救はんこそ其の  
働ふ由て功德を成したるあり

こそよりして娘の評判天下小響き渡り世の人口を開け  
ぬを譽めざる者あり画工寫真師ハまさしく燈明臺の家小  
来りて娘の寫真を取り似顔と画き或ハ其難船を救ひし  
きの有様を画小寫を者つら國中壁々の人ハ手紙を認りて  
この娘小贈り其手柄を譽る者もつら或ハ諸人相談の上六  
百不んと余の金を出合せてこそ小贈りし者もつら其面目

盛ありといふべしやもく古よりこの娘を為せし事  
小つらざらも一度世小功を立てし者ハ數千歳の今日小至  
るまでも世上小其名を忘るることふしきま今この娘の  
武勇も其芳しき名を數千歳の後小流して朽ることふら  
べし

斯く勇しき娘あきども自か謙退する徳義も亦人小優  
たるこそ神妙ふ世間小自分の評判高きを聞き却て驚て  
云く余ハ唯當然の事を為したるものと非常の働ける小非  
し瓦師の子たむの事

英吉利の國ちち名をとるのどくとる名いけん親しく自

かの見し事ありて左の話を記せり

この里に一人の職人あり焼瓦を積立るを以て家業とす  
随ふに職人ふきども酒を好み毎日稼きたる錢ハ皆こを  
と酒屋小費して一文を残り妻に唯銘々の働ふて喰  
ふまゝ小捨置きいさゝりもこを顧ることあり誠小言  
語小絶えたる次第ふきども如何せん職人ふと小珍ら  
しくぬことなり  
右の次第ふてこの職人の妻子も飢寒の難淡小陥るべき場  
合ありて唯長子のたむを頼ふて一家内の患を免く是  
たりやもくこのたむある者ハ幼少のときより父の手小就

て瓦の職の手傳ふ使とも早く其仕事を覺へて十三四歳の  
まねふハ相應ふよれた貨錢を取らどふありけはバ已ガ取  
りし錢をバ成犬け父小渡さぬやうにして自分の手小握と  
ハ此細のそと錢までも盡く母小興つて家内の費も用  
やう小せり或ハ彼の畜生小等しき父ガ酒小酔て家小歸り  
太平樂を唱へて人を罵り母も子供もこも小打まんこと成  
恐まて其側小寄付き得ざりまねふもたむをりせハ迫り其  
左右小寄りやひ言葉と和らげ顔色を尋らかふて様々小  
慰め遂小床小引へもて懸う小休息せしむるおど唯獨り小  
て心配もやあ母もこを悦び蔭ふも日向ふもたむハこ

の家の家の心心棒棒ありてこそこそ所所變變まらざる道理道理あり  
或或日日たむハ仕事仕事小小行きあつくひとひと頭頭小小載載せて高高き梯子梯子と  
上上るより足足をふもろくして下下小小積積立立たる古古瓦瓦の上上小小落落ち  
腰腰骨骨ををあぐくか小小打打て惣惣身身血血小小滌滌と氣氣絶絶けきハ其其場場小  
在在合合ふ人人々々も驚驚き走走集集りて先先づ面面小小水水を吹吹拭拭おどして介介  
抱抱ふせし漸漸く呼呼吸吸を吹吹返返して周周圍圍を見見廻廻し吟吟ももあある聲聲  
ふて泣泣て云云くたより少少ふき母母の身身ハ如如何何ああるべきやと  
叔叔怪怪我我人人をバ家家小小連連歸歸り醫醫師師を呼呼で療療治治をを折折柄柄も母母ハ  
こそ小小抱抱付付うぬをううふて泣泣つ叫叫びつ狂狂氣氣の如如くあありけ  
きバたむハ苦苦痛痛の顔顔色色を見見せむし母母小小向向ひ痛痛く泣泣き給給

ふあよ必必む全全快快して又又働働くやうやうふあるべしして療療治治と終終  
るまでまでの世世の間間小小痛痛ききも苦苦しきとと唯唯一一言言の言言葉葉も小  
かりしととつふ  
たむハ賤賤しき職職人人の子子小小て固固より讀讀むことも書書くことも  
知らざる者者あきども余余ガ説説を以以て評評をきバは武武勇勇の  
人人と云云もざる可可らむ  
第二十九章第二十九章我我本本國國を重重んむる事事  
我我身身の生生きて成成長長せし所所の本本國國を重重んむるハ天天然然の情情  
あり假假令令ひ其其國國の民民ハ開開けむして蠻蠻野野あるも假假令令ひ其其國國  
柄柄ハ賤賤しして他他國國の人人の目目を以以て見見るバつちちぬやう

小思おもたり、こも其本國そのくにの人ひと小於ちかてハ自みづかかたこきと重おもんぜ  
 ざる者ものおしこれと報國ほうこくの心こころとつふ報國ほうこくの心こころもこき依よ程ほどよ  
 くして道理だうりの圍まわりの内うち小繫ひぎかくるハ大おほ小益えきなりものか  
 報國ほうこくの心こころは人ひと皆みな其國そのくにの土地とちを大おほ切きふして假令たとひ主  
 小於ちか地面ちめんおてもこきと粗略そりやく小思おもふことなりこの心こころは  
 外國がいこくの敵てきを防まぐ小勇氣ゆうきを生なす國中こくちゆう一般いぱんの為ためと思おもふて同國どうこく  
 の人々ひとびと互あひ小相親あひましむの情なさけを生なす一ひと警おしへバ和蘭わらんの人ひとハ他  
 の國くにより小和蘭わらんの國くにを重おもんト他國たこくの人ひとより小和蘭わらんの人ひとを  
 親ましむ和蘭わらんを防まぎ守まもるためハ一命ひとこととも抛なち唯ただ一心ひとこころ小和  
 蘭わらんの繁昌はんじやうを願ねがひ和蘭わらん人の幸福しあふみを祈いのる一ひと其政府そのせいふ小對たいして

深切しんせつの心こころを抱かかり小和蘭わらん國くにの政府せいふなる故ゆゑあり其國そのくにの旋まわて  
 評議へいぎ一ひと宗旨しゆじの教しゆを進すすめ世間よこしまの萬事ばんじを取扱とり扱とりたため小行なは  
 る一ひと并ならび政度せいど風俗ふうそくを良よしとる小和蘭わらん國くにの政度せいど風俗ふうそくなるが  
 故ゆゑあり右みぎの次第しだいを以もつて和蘭わらんの人ひとハ太平たいへい無事むじの民たみと為なりて  
 政府せいふ小逆さかふこと小あく人々ひとびと互あひ小力ちからを合あはせ心こころを同おなじくして一  
 國くにの繁昌はんじやうを致いたすあり假令たとひ他國たこくの政府せいふより和蘭わらんを支配しはいする  
 ことつとバ假令たとひ其政度せいど風俗ふうそくは一ひとかたよりして其本國そのくにハ  
 小相應あひあはるる小和蘭わらんの人ひとハ決かしてこき小歸服きふくせざるべし  
 本國ほんこくを重おもんむるの心こころも上かみ小記しせり如ごとくこきを程ほどよくし  
 小大おほ小益えきなり雖なども若もし其度そのど小過あやまらば道理だうりを願ねがふこと小

至るべきハこきがため害を生むること甚多し假令ハ我  
 本國を重んずるも前後を顧みずして國の瑕瑾とみるべき  
 舉動何れハからん國民の成行不害とみるべき罪を犯す  
 かも此ハ報國の心ならずして活るる眼なきものといふべし  
 我國を大切と思へばとて妄に他の國を賤しむべからず妄  
 に他國の人を嫌ふべしとてこき一一人の身の上小警へて  
 云らん不恰も我一人を高く構へて他人ハ我不等し徳義  
 なくして我不等し面目を得べしとざるものと思ふが如  
 し固より正しからざる事柄にて我國を和む者何れハこれ  
 を防禦するハ論を俟ざることなきとも格別の趣意も何れ

ざる不我より我に他國を攻んずるに妄に兵を擧さるや  
 う心を用申さるべきあり九を世の中ハ戦争わざりしものハ  
 何れも方々止むを得ざる小何れも是ハ必也これを企つべ  
 くと又我國不於て産物の道を開き交易商賣の法を盡し  
 して自國の利を謀るハ勿論のことなきとも産物商賣の事  
 不就き他國を害して我國を利すべきものと思ふを  
 他國の繁昌ハ我國の利益あり其次弟ハ何色の國不も繁  
 昌も其國の人ハ富を致して我國の人の賣る物を買ふ  
 べきり故小詰る所ハ我國も彼國も其繁昌の幸福を共小  
 するの理なきばかり

右小論をカ野を一口云へバ一人の身の上の規則を以て  
 一國の上かつてをむべきなり九を人として正しき道なき  
 一背へざるは我身を愛し我利益を求るふ於て差支はる  
 と雖も獨り我ためを謀るのそあつを兼て亦同類の人と  
 愛し我力小叶ふことなきは他人のためをも謀らざるべし  
 らを國も亦斯の如し九を一國たる者ハ正しき道なき人背  
 りざるは自國を愛し自國の利益を求るふ於て差支ありと  
 雖も唯獨り自國のためを謀るのそあつを兼て亦他國を  
 親しむ力と盡して他國のためを謀りわづらふも其不幸  
 と祈り々わづらふ斯の如く相互ふ其ふれことを祈るハ双方

のための利益あり世間の人々皆幸福を得てあつるよく世  
 を渡りたりハ我身も亦其あつるより人の間ふ交して共小  
 其幸福を與ふまぐ他の國々皆繁昌して太平無事を樂む  
 たりハ我國も亦繁昌して共小太平無事を樂むべきもさバあ  
 り

① ぎりいさきの將軍船を焼かんとせし事

往古ぎりいさきの内の何せん國の將軍でととくるもハ武  
 將たきとも正しき人物小つたを安小自國のためをと思  
 過せし余も小理非を顧らむ其鄰國ふらせでも人を滅さ  
 んと欲して頻ら小工夫を運らし或日國民寄合の席あつ今

當國の威勢を盛みして、らせでもんを押し倒さくま一の策略  
 巧きども其策略極て秘密あるはこの席あて口外もくか  
 顔くハ列坐の面々して一人の人物を撰で余が相談相手  
 命給てるべしこの人若し余が策略を良とせば則ちそ  
 の通ずる取計は後の日お至り諸君お於て異論もくか  
 ぞと云ひけはバ列坐の人ハさきバそて兼て諸人の信仰せ  
 る所の「何りまたいどを」ふる者を撰で相談相手の役お命  
 たりてをそそくろるまハ「何りまたいどを」近く招きこきお  
 秘密を告て云ふやう、今近處の港お破船せららせでもん  
 の軍艦並お「きり」いさ諸國の船を不意お襲ふて残らば焼拂

ひふバ此國の勢ならち盛みありて「きり」いさの諸國を押し  
 領もくさきと必定ありと「何り」けはバ「何り」またいどをハ可  
 否の返答もせして彼の寄合の席お歸り國民お告て云く  
 この國の利益を思へバ將軍の策略お若くものありと雖ど  
 も亦この策略お正しかならざるものハありるべしと云ひ  
 けはバ列坐の人々も其事の次第を問をて即席お評議  
 を變し將軍の説を拒みたりとぞ  
 歴史家の「ろる」んふきを評して云く九を歴史の中お斯く  
 ても驚くべく又譽むべきことハ「何り」を彼の「きり」いさの  
 評議おて「何り」またいどをの言を聞き義を先おして利を後

ふまへしと決したる者ハ學者ハハのちを以て尋常の國民  
あり文字を知る學者あつたに義理を辨別すべきも當然の  
ことなきとも無學文盲の土民かて固より其本國を重んじ  
只管國のためとの思込し者共ある唯一言の言葉を開  
き義理お背くためふて本國の利を棄たるハ實おこを  
を神妙といふべきあり

ろかきいの義士の事

紀元千三百年の時代英吉利王第三世とあると佛蘭西ハ  
攻へりかきいの城を圍むこと一年余ふして克たむこせり  
ためお英吉利の兵士を失ふことも夥多しけきハ英吉利王

の怒ること一方あつたを兎角を問ふ城中ハ兵糧つきてせ  
んかたなく降参の儀を申入るに英吉利王ハ容易ふこ  
をを聞入るを以て云くよく以て余ガ差圖のよしお従ひ  
ふハ降参も許さぬけきとも若しさもふくハ城内の人を盡  
く殺し其物を盡くお捕まへしとけきハ旗本お列る大  
將おの人もこきを聞きおははりて慈悲なき仕方ありて  
様々おなふめしお付王ハ又勸解してさうハ一段の用捨を  
以て左の如く申渡さべしとの命けり即ち其簡条ハ城内頭  
おの者六人足ハ徒跪かて頭ハ冠りものを着けし襦袢一  
枚お首お繩を附け城門の鍵を以て王の前お出づべし然



乃上ハ王の心次第ハこの六人の者を取扱ひこまを生うる  
 もこまを殺しも唯王の心不在るの事兎小角ハこの命の如  
 く為さバ許し難き場合ふせども城内ハ残カ者共ハ其降  
 参を許して命を助くべしとのことあり  
 この申渡しの書面城内ハ来り諸人寄合の席ふてこまを讀  
 むらバ何れも皆打驚き斯る情あり役前を誰カ勤る者何  
 らん英吉利王の無理非道何とせんかたも何れも唯歎  
 き悲むをかりやせしガ列坐の内ハよをまていもでさんと  
 びいある者何れも獨り進み出で云く假令ハ今一身の血  
 を流し命を失ふとも此の城下の災難を救ふて敵の乱妨を

免せしむる人ハ天小對して勤を全ふしたる者といふべし  
 國小對して忠義を盡したる者といふべし余ハ余ガ首を以  
 て英吉利王ハ渡しか是の城の償と為さるべしと列坐の人  
 もこの口上を聞き誰カ心を動かしらん涙を無き聲を發  
 して其義心不感せざる者あり他ハ又五人の義士何れも  
 此の舉動を見てさるるを立て共ハ身を棄て其難  
 を與ふせんさる英吉利王の差圖ハ任せまじふさ支度調へ  
 て城外へ出行きたりをもく此時の支度人の目ハ此の  
 不けきとも其實を考ふせば大人貴族の装束を著るよりも  
 身の面目といふべきあり

叔六人の義士ハ襦袢一枚徒跣はきして冠かんむりりものともかぶらば  
 首くびハ繩なはを附つけて英吉利王の前まへハ引出ひきさき一命いちめいと差出さして  
 城内じやうの者の赦免しやくめんを願ねがひまきば王わうハこれを見みるより眼まなこと怒いか  
 らし聲こゑと叫なりだて汝等なんぢらガ強情がうじやうハ籠城ろうじやうせしうためハ我軍勢わがぐんせい  
 の損亡そんじやう一方いっぽうあつて重々ちゆうぢゆうの罪つみあるをくかふをうて左右さうぶの者  
 を呼よびこの場ばハ彼等かゝらの首くびをまねうと申渡まをせしうハ旗本はたご  
 の面々めんめんあるあるとるよりと始はじめとして貴族きぞくの人々ひとら皇太子みかど工  
 ても皆みな彼の義士ぎしを憐あはれ何卒命なにぞめいをうてハ赦ゆるし給たまはるべしと  
 諫いさむきとも更さらハ聞き入いるべき様ようも叫なりだせ  
 此時英吉利王いぎりぎわうの皇妃陣中わうきじんぢゆうの見舞みまひとして本國ほんこくより来きりて王わう

の側わきハ在ありてこの皇妃わうきハ國王出陣くわうくわうしゅつぢんの留主るしゅ中ぢゆうハ國の内乱くわいのないらんを平  
 け蘇格蘭そくわらんの君きみをも生捕せいとせしわどの武功ぶくわうもつり且かつこのと  
 きハ若君わうきみとも生なまたきハ王わうの最も親おし愛あいをる所ところの者ものハ  
 最前さいぜんより王わうの怒いかり有様うさまを見て逃にげ自分じぶんハ叫なりだ  
 せバ彼の助命すけめいハ叫なりだすと思おもひ乃すなはち王わうの前まへハ伏ふしてこも  
 小寄せうぎをせり涙なみだを流ながしてこの度遙々たひよ海うみを越こへ危あやきを犯とり  
 てこの陣中ぢんぢゆうハ来きりて唯君ただきみを思おもふ君きみハ仕つかへ奉たごらんがた  
 めありまきバ今いまの恵めぐみを願ねがふも亦また無理むりハハ叫なりだすも  
 何卒天なにぞてんと敬うやまひ蔡さいを愛あいして彼の六人むにんの者ものを赦ゆるし給たまはる  
 と云いひけきハ王わうも暫時しばしば思案しあんの体ていありて黙止もくぢし兼かつたうと

童蒙孝章 卷の五

見へ皇妃ふ向て云く余實ハ今日君がつて不在らざると頼  
ふなりさきども今君の頼とゆきばこそ成聞らざれば得じ  
この囚人ハ君小任とら者ふれば勝手小取計ひ給ふべし  
皇妃ハ助命の恵を頼取りて其の悦あしめたり取敢て新  
らさ衣服を調へて六人の者の支度を改めさせ英吉利の  
陣將を送り出して城内へ送りたりとや

童蒙卷之五 草卷の五大尾



終